楊雄 「反離騒」を読む

嘉 瀬 達 男

楊雄[①]（前53～後18）は前漢末より新の頃、文学・思想の枠を越え、多様な著作を遺した人物である。その作「反離騒」は、楚の忠臣屈原を悼み、屈原の遺した「離騒」に倣って著された韻文である。そして現存する楊雄作品の中では最も早い時期の一篇であり、漢代に作られた多数の楚辞作品の一つとしても興味深いものである。しかし「反離騒」は必ずしも読みやすい文ではない上、邦訳は文語訳しかない[②]。そこで今、本文を校定して訓読と現代語訳を添え、若干の考察を加えることにしたい。

本文を読解する前に、楊雄自身による序文があるので、一瞥しておく[③]。ここに作成の経緯や目的について記されているからである。

〔原　　文〕

蜀有司馬相如、作賦甚弘麗温雅。雄心壯之、毎作賦、常擬之以爲式。又怪屈原文過相如、至不容、作「離騒」、自投江而死、悲其文、讀之未嘗不流涕也。以爲君子得時則大行、不得時則龍蛇、遇不遇命也、何必湛身哉。乃作書、往往摭「離騒」文而反之、自嶓山投諸江流以弔屈原、名曰「反離騒」。又旁「離騒」作重一篇、名曰「廣騒」、又旁「惜誦」以下至「懐沙」一卷、名曰「畔牢愁」。「畔牢愁」「廣騒」文多不載、獨載「反離騒」。

〔訓　　読〕

蜀に司馬相如有り、賦を作るに甚だ弘麗温雅なり。雄心に之れを壮とし、賦を作る毎に、常に之れに擬(なぞら)へ以て式と為す。又た屈原の文の相如に過ぐるに、容れられざるに至りて、「離騒」を作り、自ら江に投じて死するを怪しみ、其の文を悲しみ、之れを読みて未だ嘗て涕を流さざるはなし。以為へらく、君子は時を得れば則ち大いに行ひ、時を得ざれば則ち竜蛇す、遇不遇は命なり、何ぞ必ずしも身を湛(しづ)めんや、と。乃ち書を作り、往往に「離騒」の文を摭(ひろ)ひて之れに反し、嶓山より諸れを江流に投じ以て屈原を弔ひ、名づけて「反離騒」と曰ふ。又た「離騒」に旁(よ)り一篇を作り重ね、名づけて「広騒」と曰ひ、又た「惜誦」以下「懐沙」に至る一巻に旁り、名づけて「畔牢愁」と曰ふ。「畔牢愁」「広騒」の文多ければ載せず、独だ「反離騒」のみ載す。

これによって「反離騒」を制作した経緯をまとめると次の通りである。楊雄は同郷の作家司馬相如を範として辞賦を創作していたが、司馬相如より優れた作品を遺した屈原が、世に容れられなかったために「離騒」を遺して投水した行動を疑問に感じた。そこで「反離騒」を作って屈原の霊を慰めようと考えたのである。

屈原は楚の高潔な忠臣でありながら、讒言に遭った悲劇の人であり、「離騒」の作者であると、楊雄の当時広く信じられていた[④]。そこで祖先を楚にもつ楊雄は、この忠臣に深く同情したもの

と思われる。「反離騒」のほかにも、「離騒」にならって「広騒」、「楚辞」の「惜誦」から「懐沙」までの一巻にならって「畔牢愁」なる作品を作ったと序にある。

以上の背景をもつ「反離騒」であるが、文学史においては「離騒」の模倣作というほどの評価を与えられて等閑視されがちである[5]。他方、思想史においては序に「よい時に遇うか否かは「命」である」と述べられる、楊雄の時命論ばかりが問題とされている[6]。そこで以下では「離騒」と比較しながら訳解し、楊雄の作品の中での意義、「楚辞」の作品群の中での位置づけなどいくつかの問題を考えてみたい[7]。

〔原　　文〕

有周氏之蟬嫣兮、或鼻祖於汾隅。靈宗初諜伯僑兮、流于末之楊侯（魚平）。
淑周楚之豐烈兮、超既離虖皇波。因江潭而往記兮、欽弔楚之湘纍（歌脂平）。
惟天軌之不辟兮、何純絜而離紛、紛纍以其淟涊兮、暗纍以其繽紛（眞平）。

〔訓　　読〕

周氏の蟬嫣（せんえん）たる有り、鼻祖は汾隅に或（あ）り。靈宗は初めて伯僑を諜（てふ）し、末の楊侯に流る。

周・楚の豐烈たるを淑（よし）とするも、超として既に皇波を離る。江潭に因りて記を往（おく）り、欽しんで楚の湘累を弔ふ。

惟れ天軌の辟（ひら）けず、何ぞ純絜にして紛に離（あ）はしめ、累を紛（みだ）さしむるに其の淟涊（てんでん）を以てし、累を暗ましむるに其の繽紛（ひんぷん）を以てする。

〔現代語訳〕

連綿と続く周氏、その鼻祖は汾水のかたわらに起こった。家譜には伯僑が始祖に記され、その後裔は楊侯に及んだ。

偉大なる周・楚をよしとするも、既にはるかにその大波より遠ざかっている。いま長江のほとりより弔文を流れに乗せて流し、謹んで楚の屈原の冥福を祈ろう。

ああ天の道は開けず、屈原の純潔をして紛乱に遭わしめ、汚辱によってかき乱し、汚穢によってその輝きを失わせた。

この段は前書きに相当する。「離騒」では「高陽帝顓頊の末裔、わが父を伯庸という」と詠い出される部分である。

「周氏」「汾水」「伯僑」などの名は「楊雄自序」にも見え、自序の冒頭に楊雄の祖先が汾水のかたわらの周の伯僑に起こり、後裔が楊侯に及んだことが記されている[8]。楊雄の祖先が周の名族より起こったというのは、これから屈原を祀る礼を行うのに楊雄がふさわしい人物であることを言うのであろう。

そして屈原が高潔でありながらよき時にめぐりあわなかったため、この弔文を長江に流し、その霊をなぐさめることを述べる。

〔原　　文〕

漢十世之陽朔兮、招搖紀于周正、正皇天之清則兮、度后土之方貞（耕平）。
圖纍承彼洪族兮。又覽纍之昌辭、帶鉤矩而佩衡兮、履欃槍以爲綦（之平）。

素初貯厥麗服兮、何文肆而質鼚。資娵娃之珍髢兮、鬻九戎而索賴（祭平）。
鳳皇翔於蓬陼兮、豈鴛鵝之能捷。騁驊騮以曲蘍兮、驢騾連蹇而齊足（屋盍去）。
枳棘之榛榛兮、蝯貁擬而不敢下。靈修既信椒・蘭之唼佞兮、吾纍忽焉而不蚤睹（魚上）。
衿芰茄之綠衣兮、被夫容之朱裳、芳酷烈而莫聞兮、不如蘖而幽之離房（陽平）。
閨中容競淖約兮、相態以麗佳。知衆嫭之嫉妒兮、何必颺纍之蛾眉（支脂平）。
懿神龍之淵潛、慶竢[9]雲而將擧。亡春風之被離兮、孰焉知龍之所處（魚上）。
愍吾纍之衆芬兮、颺爆爆之芳苓、遭季夏之凝霜兮、慶夭頽而喪榮（耕平）。

〔訓　　読〕

漢の十世の陽朔、招揺は周の正を紀し、皇天の清則を正し、后土の方貞に度る。

累を図るに彼の洪族を承く。又た累の昌辞を覧るに、鉤矩を帯びて衡を佩び、欃槍を履み以て綦と為す。

素より初め厥の麗服を貯へ、何ぞ文の肆にして質の鼚き。娵・娃の珍髢を資り、九戎に鬻ぎて賴を索む。

鳳皇は蓬陼を翔くれば、豈に鴛鵝の能く捷きことあらん。驊騮を騁するも曲蘍を以てせば、驢騾も連蹇して足を斉しくす。

枳棘の榛榛たれば、猿貁も擬ひて敢へて下らず。霊修の既に椒・蘭の唼佞を信ぜしに、吾が累は忽焉として蚤に睹ず。

芰茄の緑衣を衿び、夫容の朱裳を被、芳りは酷烈なるも聞こゆること莫ければ、蘖みて之れを離房に幽すにしかず。

閨中に容は淖約を競ひ、相ひ態するに麗佳を以てす。衆嫭の嫉妒を知りて、何ぞ必ずしも累の蛾眉を颺げん。

神竜の淵潛を懿とするに、慶あ雲を竢ちて将に挙がらんとす。春風の被離亡くんば、孰か竜の処る所を知らん。

吾が累の衆芬を愍れむは、燁燁たる芳苓を颺ぐるも、季夏の凝霜に遭ひ、慶あ夭頽して栄を喪へばなり。

〔現代語訳〕

漢朝の第十代成帝の陽朔元年、北斗七星の柄は周の暦の正月を指し、天の清廉なる定めを正し、地の貞潔なる決まりにふみ従っている。

一方屈原に目をやると、かの大族の流れをくんでいる。またその優れた文辞を見れば、コンパスと差し金を帯にかけ天秤を身につけ（公平で高潔）、妖星を踏みつけて足の飾りとしている。

はじめよりその麗しき衣服をたくわえながら、どうして文様を大胆奔放にして内実は狭量なのか（更なる文様は必要なく、性格を寛大にすべきであった）。魏や呉の美女の麗しい髪を手に持ちながら、どうしてえびすの国で利益を得ようとするのか（髪を結わないえびすが求めるはずがない）。

鳳凰であってもヨモギの茂みの中では、どうしてガチョウのように俊敏に走ることができよう。駿馬を駆るにも曲がりくねった悪路であっては、ラバの鈍足とも足並みをそろえよう。

カラタチやイバラが繁茂していれば、サルも用心してそこに下りては来ないもの。主君は既

に子椒・子蘭の悪言を信じているのに、君はおざなりにしてにわかにそのことに気付かない。

ヒシとハスの緑衣をまとい、芙蓉の紅き袴をつけるが、芳香は強く濃厚であっても誰もかぐものはないから、衣裳はたたんで奥の部屋にしまっておくに越したことはなかろう。

女性は寝室に艶色を競い、それぞれに佳麗な姿をなしている。美女たちの嫉妬がわかっているのだから、どうしてわざわざ君の美しい眉をあげる必要があろう。

竜は（時局を見て）淵にひそむのを善しとするものを、ああ（君は）雲をとらえて高く上がろうとした。春風が吹き散らさなければ、誰が竜の所在を知ろうか。

君の豊かな芳香が痛ましいのは、大いに馥郁たる香りを放っていながら、有ろうことか夏の降霜に遭い、枯れ急いで栄華を失ったからである。

この段冒頭の「漢朝の第十代成帝の陽朔元年」は紀元前24年に当たる。「周の暦の正月」はこの儀式が行われた時である。世も治まり、よき時に弔文は読み上げられたのである。なお、成帝の陽朔元年は楊雄三十歳、なお故郷の成都にあった。

そしてこの部分以下では屈原の行事・言動を挙げ連ね、一つ一つその誤りを批判し、疑問を提示していく。

まず、血統・文辞・容姿に優れながら、奔放に振る舞ったために人に理解されなかったことを述べ、更に場所や道の誤りによって能力が発揮できなかったのは、周りを見る慎重さが欠けていたからであり、暗君が悪言に惑わされていることにも早く気づくべきであったという。優美な服装も理解されないなら隠すべきである。徒に嫉妬を招く必要はないし、時局によっては隠遁し、また時を得て世に現れるべきであるのに、時季を誤っては誰にも知られずにただ衰えていくばかりであると嘆く。

なお「離騒」では、冒頭に「寅年の正月、寅の日」と主役の生まれた日を記すほか、「芰茄之衣」「夫容之裳」「衆女嫉」「霊修」といった語が用いられている。

〔原　　文〕

横江・湘以南往兮、云走乎彼蒼吾、馳江潭之汎溢兮、將折衷虖重華（魚平）。
舒中情之煩或兮、恐重華之不纍與、陵陽侯之素波兮、豈吾纍之獨見許（魚上）。
精瓊靡與秋菊兮、將以延夫天年、臨汨羅而自隕兮、恐日薄於西山（眞元平）。
解扶桑之總轡兮、縱令之遂奔馳、鸞皇騰而不屬兮、豈獨飛廉與雲師（脂歌平）。
卷薜芷與若蕙兮、臨湘淵而投之、棍申椒與菌桂兮、赴江湖而漚（魚平）之。
費椒稰以要神兮、又勤索彼瓊茅、違靈氛而不從兮、反湛身於江皐（幽平）。
纍既㚔夫傳說兮、奚不信而遂行。徒恐鷸鴠之將鳴兮、顧先百草爲不芳（陽平）。
初纍棄彼虙妃兮、更思瑤臺之逸女、抨雄鳩以作媒兮、何百離而曾不壹耦（魚上）。
乘雲蜺之旖柅兮、望昆侖以樛流、覽四荒而顧懷兮、奚必云女彼高丘（幽平）。
既亡鸞車之幽藹兮、焉[10]駕八龍之委蛇。臨江瀕而掩涕兮、何有九招與九歌（歌平）。
夫聖哲之不[11]遭兮、固時命之所有。雖增欷以於邑兮、吾恐靈修之不纍改（之上）。
昔仲尼之去魯兮、斐斐遲遲而周邁、終回復於舊都兮。何必湘淵與濤瀨（祭去）。
溷漁父之餔歠兮、絜沐浴之振衣、棄由・聃之所珍兮、蹠彭咸之所遺（脂平）。

〔訓　　読〕

江・湘を横ぎり以て南に往き、云に彼の蒼吾に走り、江潭の汎溢たるに馳せ、将に重華に折衷せんとす。

中情の煩或を舒ぶるも、重華の累に与せざることを恐れ、陽侯の素波を陵ぐも、豈に吾が累のみ独り許されん。

精瓊靡と秋菊と、将に以て夫の天年を延べんとしながら、汨羅に臨みて自ら隕ち、日の西山に薄るを恐る。

扶桑の総轡を解き、縦に之れを遂に奔馳せしむるも、鸞皇騰がりて属せず、豈に独だ飛廉と雲師と与にせん。

薜芷と若蕙とを巻き、湘淵に臨みて之れを投じ、申椒と菌桂とを混じ、江湖に赴きて之れを漚す。

椒・糈を費やし以て神を要め、又た勤めて彼の瓊茅を索むるも、霊氛に違ひて従はず、反って身を江皐に湛む。

累の既に夫の傅説を𠂤はば、奚ぞ信じずして遂に行る。徒だ鶤鵕の将に鳴かんとするを恐れ、顧って百草に先んじて芳しからざるを為す。

初め累は彼の虙妃を棄て、更めて瑤台の逸女を思ふ。雄鳩をして以て媒を作さしめば、何ぞ百たび離れて曾て壱たびも耦はざる。

雲蜺の旖旎なるに乗り、昆侖を望み以て樛流し、四荒を覧て顧懐せば、奚ぞ必ずしも云に彼の高丘に女へん。

既に鸞車の幽藹たる亡きに、焉くんぞ八竜の委蛇たるに駕せん。江瀕に臨みて涕を掩ふに、何ぞ九招と九歌と有らん。

夫れ聖哲の遭はざるは、固より時命の有つ所。増欷し以て於邑すると雖も、吾れ霊修の累に改めざるを恐る。

昔、仲尼の魯を去るに、婁婁遅遅として周遍し、終に旧都に回復す。何ぞ必ずしも湘淵と濤瀬ならん。

漁父の餔歠を溷れりとし、沐浴の振衣を絜しとし、由・聃の珍とする所を棄て、彭咸の遺す所を蹠める。

〔現代語訳〕

（君は）長江・湘水をわたり南に向かい、（聖人舜帝の崩じた）あの蒼吾に赴き、みなぎる江水のもとに馳せ、舜帝に正しい答えを得ようと願った。

心中の煩悶を申し述べたけれども、舜帝の君に同調しないことを恐れ、水神の陽公が起こす大波を越えた。しかしどうして君ひとり許されることがあろうか。

細かい玉紛と秋菊によって、天命を延ばそうとしながら、自ら汨羅の淵より身を投げ、（その上）時の果てるのを恐れたのだ。

（日の出のかすめる）扶桑の木につないでいた（駿馬の）手綱をほどき、好きなように駆けめぐらせても、鳳凰はすでに翔け上がってしまい供をしないのでは、どうして風神の飛廉と雲師の豊隆だけが（馬に）つきそうことがあろうか。

香草の当帰と白芷（ともにセリ科）、杜若と蕙草（メボウキ）を巻き束ね、湘水の淵より投げ入れ、申椒（ハジカミ）と菌桂（肉桂の一種）をくくって、江湖に赴き水に沈めた。

山椒と精(しら)げ米(よね)を振りまいて神の来臨をもとめ、力を尽くして不思議な霊草を探し回った。しかし占い師霊氛の占断を聞かずに逆らったので、ついに江水に身を落とすこととなったのだ。

既に君がかの賢人傅説のことを慕うならば、どうして（傅説のように自らの行動の正しさを）信じて生きず、国を去ったのか。ただホトトギスが鳴き始める（季節になる）のを恐れて、却って衆草より先に枯れてしまうとは。

君ははじめ神女の虙妃をうち捨て、新たに玉の高殿にたたずむ美女簡狄(かんてき)に思いを寄せた。しかし毒鳥の雄鴆に仲立ちをさせたのでは、離れていくばかりで一度たりとも会えるはずはない。

たなびく雲と虹に乗り、昆侖の山並みをながめて巡遊し、四方に目をやり思いを凝らせば、祖国楚の君主に仕える必要は到底あるまい。

鳳の壮麗な車が無いのに、八頭の竜をうねらせ曳航させることがどうしてできよう。水際に到り涙をぬぐいながら、どうしてかの「九招」と「九歌」を歌ったのか。

聖人賢哲の不遇は、そもそも運命のもたらしたもの。いくら悲嘆し煩悶を重ねても、楚王が君への思いを改めなかったのが嘆かわしい。

かつて孔子が故郷の魯を立ち去った時には、行きつ戻りつ諸国をさまよいながらも、最後は祖国に帰りついたのだ。どうして川辺や波濤に赴く必要があろうか。

あの漁父がすする水を濁っているとし、身を清め塵を払った衣こそ清潔とし、許由・老聃の尊ぶ道を顧みず、どうして彭咸の進んだ跡を追ったのか。

後半では「離騒」に見える、天上の世界へ遊行し屈原がとった行動を批判する。その批判を簡単にまとめれば、延命をはかりながら自ら投身したことの矛盾であり、意志の薄弱と心の迷いであり、また視野の狭窄と行動選択の誤りなどである。

この部分には「離騒」に基づく表現がきわめて多い。「離騒」に描かれるのと同じ世界を遊行するとはいえ、前半部に比べ「離騒」より援用する語彙の量は格段に増えている。まずほとんどの地名や人名が「離騒」に基づいている。以下に挙げる。

蒼吾、重華、汨羅、飛廉、雲師、傅説、虙妃、瑶台之逸女、昆侖、高丘、霊修

それ以外の「離騒」と重なる表現や語句を挙げてみる。

精瓊靡、秋菊、恐日薄於西山、扶桑之総轡、鸞皇騰、薜芷、申椒、菌桂、費椒稽以要神、索彼瓊茅、違霊氛而不従、鵜鴂、恐将鳴、百草為不芳、鴆以作媒、不壱耦、雲蜺、覧四荒、八竜、委蛇、掩涕、九歌、漁父之餔歠、絜沐浴之振衣

以上のように「反離騒」は「離騒」の内容・構成・表現を踏まえ、それに則りつつ屈原の行動を批判している。序に「往往に離騒の文を摭ひて之に反す」と言う以上に「離騒」に依拠し、追随していると言えよう。作成の経緯、付された題名から考えても、それは自然なことであるが、これほど粉本に依存した作品は当時ない。現代から見れば、独創性に欠けた「離騒」の模倣作品であるが、より肯定的にとらえるならば、「離騒」の構想に依拠した半創作作品とでも言うべきもので、「離騒」の変奏曲と見なすことさえできる。当時にあっては却って新奇な表現と受け止められたと思われる。

そして「反離騒」制作の背景には、楊雄の屈原に対する思慕の念がうかがえる。それは楊雄にこの「反離騒」のほか「広騒」「畔牢愁」の作があり、また「楚辞」天問に対して注釈を加えていることからも知られる[12]。そのほか「楚辞」に倣った騒体の作品には「太玄賦」もある。

そもそも「楊雄自序」には自作より７篇の文章を選んで掲載しているが、その第一に挙げられるのがこの「反離騒」である。周知の通り楊雄は多数の作品を模倣表現によって生み出したが、現存する作品のうちこの「反離騒」が最も早い時期の一篇なのである。このように考えると今では評価されない「反離騒」であるが、当時にあって、また楊雄にとっては非常に重要な一篇であったと認められる。

これまでに筆者は、楊雄の表現に関して『法言』と五経の関係を調査したことがある（「『法言』の表現―経書の援用と模倣」、『学林』36・37、中国藝文研究会、2003年）。今「反離騒」と『法言』の表現を比較してみると、明確な差異が見て取れる。「反離騒」の模倣は粉本に極めて近く忠実であった。それに対し『法言』は五経の「経文を自在に散りばめ、文中に溶け込ませた表現」（前出論文、172頁）であり、粉本の存在を読者に暗示するにとどまる。『法言』はそもそも『論語』を粉本とするのだが、しばしば『論語』の口吻を模したものと言われるように、『法言』の模倣は婉曲的である[13]。そして先の拙論が五経との関係を論じたように、『法言』に援用されているのは『論語』以外にも多い。「反離騒」にも「離騒」以外からの援用はあるが、殊更に取り上げるほどのものはない。

以上のように「反離騒」と『法言』の模倣は明らかに異なる。確かに騒体の韻文と『論語』を模倣した語録体という根本的な差異はあるものの、その差は制作時期にも起因するように思われる。「反離騒」は楊雄30歳、現存する最初期の作であり、『法言』は最晩年70歳頃まで執筆していた可能性がある。実に40年近い懸隔が考えられるからである。

次に「楚辞」作品として「反離騒」の位置づけを見てみたい。「楚辞」は漢代に伝えられ、後続作品や注釈が多数作られた。両漢期に作られた、「楚辞」の影響が明らかな作品を挙げてみると以下のようになる[14]。

賈誼「弔屈原賦」「惜誓」、枚乗「七発」、厳忌「哀時命」、淮南小山「招隠士」、東方朔「七諫」、司馬相如「哀二世賦」「大人賦」、班倢伃「自悼賦」、王褒「九懐」、劉向「九嘆」、楊雄「広騒」「畔牢愁」「太玄賦」、崔篆「慰志賦」、馮衍「顕志賦」、班彪「北征賦」「悼離騒」、班固「幽通賦」、梁竦「悼騒賦」、張衡「思玄賦」、蔡邕「述行賦」

「反離騒」と何らかのつながりが考えられるものを中心に選んだが、これらの作品を一瞥すると、多くは「兮」字を多用する騒体であり、いわゆる賢人失志、士の不遇を詠う作品が目につく。それはまた漢代楚辞の一つの傾向として考えられることである。それでは、「反離騒」も賢人失志、士の不遇を詠う作品なのだろうか。確かに屈原の不遇に楊雄自身の不遇感を重ねている部分もあろうが、主題はやはり序に言うよう屈原を弔うことにあろう。だから『文心雕龍』は「反離騒」を哀弔篇にて論じている。哀弔篇では賈誼「弔屈原賦」、司馬相如「哀二世賦」、班彪「悼離騒」、蔡邕「弔屈原文」と並べられ、騒体の弔辞と見なされている[15]。

他方、「反離騒」を屈原批判の作と見て、楊雄の批判の是非を論ずる者もいる。朱熹『楚辞後語』（前出）や洪興祖『楚辞補注』（中華書局、1983）はそれぞれ「離騒之讒賊」「妾婦児童之見」

と非難するが、適切な評ではあるまい。胡応麟が言う「屈原を深く愛する者でなければこの文は書けない」という方がよかろう[⑯]。

なお、上記作品のうち、王褒「九懐」や劉向「九嘆」は「楚辞」の用語を多用しているが、「反離騒」ほど甚だしく粉本に依拠した作品は見られない。

---

① 楊雄の姓は「揚」とも書かれるが、段玉裁の説（『経韻楼集』巻五「書漢書楊雄伝後」）により「楊」字を用いる。ただし引用はその限りではない。

② 管見によれば、小竹武夫『漢書・下』揚雄伝上（筑摩書房、1979年）に文語訳が見えるのみである。なお『文心雕龍』哀弔では「反離騒」の読みにくさを次のように述べている。「思積功寡、意深文略、故辞韻沈朧。」（范文瀾『文心雕龍注』、人民文学出版社、1958年）

③ 「反離騒」およびその序は『漢書』楊雄伝に収録されている。そして『漢書』楊雄伝が楊雄の自序であることは拙論「『漢書』揚雄伝所収「揚雄自序」をめぐって」（『学林』28・29号、中国藝文研究会、1998年）を参照されたい。

④ 現在「離騒」は屈原の没後に屈原周辺の人々によってまとめられたと考えられている。小南一郎『楚辞とその注釈者たち』（朋友書店、2003年）序章および第三章一節に詳しい。

⑤ たとえば優れた楊雄研究家の康達維氏でさえ「「反離騒」芸術成就不高、劉勰説「極思功寡」（『文心雕龍』哀吊）、誠為実論。」と芸術性に疑問を呈している（霍松林編『辞賦大辞典』、「反離騒」の項、江蘇古籍出版社、1996年）。

⑥ 「反離騒」を論じた主要論文には以下のものがあり、いずれも「時命」を問題としている。町田三郎「揚雄の賦について」（岡村繁教授退官記念論集刊行会編、『中国詩人論―岡村繁教授退官記念論集』、汲古書院、1986年）、多田伊織「揚雄論」（『日本研究』11、国際日本文化研究センター、1994年）、本田千恵子「揚雄小考―「反離騒」―」（『国学院中国学会報』41、国学院大学中国学会1995年）などがある。

⑦ 以下原文は『漢書』楊雄伝上（中華書局、1962年）により、訳解には王先謙『漢書補注』（影王氏虚受堂本・芸文印書館）、張震沢『揚雄集校注』（上海古籍出版社、1993年）、鄭文『揚雄文集箋注』（巴蜀書社、2000年）、朱熹『楚辞後語』（『古逸叢書』所収、江蘇広陵古籍、1990年）、小竹武夫『漢書』（前出）などを参照した。韻字は羅常培・周祖謨『漢魏晋南北朝韻部演変研究(第一分冊)』(科学出版社、1958年)に摘録されたもののみ丸印を附し、韻部と四声を括弧内に示した。韻部に両韻字を奉げているのは合韻である。

⑧ 原文は次の通り。「其先出自有周伯僑者、以支庶初食采於晋之揚、因氏焉、不知伯僑周何別也。揚在河・汾之間、周衰而揚氏或称侯、号曰揚侯。会晋六卿争権、韓・魏・趙興而范中行・知伯弊。当是時、偪揚侯、揚侯逃於楚巫山、因家焉。」

⑨ 「慶竢」はもと「竢慶」に作るが、『漢書補注』に従い改める。

⑩ 『漢書補注』により「焉」字を補う。

⑪ 『漢書補注』により「不」字を補う。

⑫ 楊雄が天問に注釈を加えたことは王逸『楚辞章句』天問叙に次のように見える。「昔屈原所作凡二十五篇、世相教伝、而莫能説。天問以其文義不次、又多奇怪之事。自太史公口論道之、多所不逮。至於劉向・揚雄、援引伝記以解説之、亦不能詳悉、所闕者衆、日無聞焉。既又解詞、乃復多連蹇其文、濛頌其説、故厥義不昭、微指不晢。自游覧者、靡不苦之而不能照也。」

⑬ 弛和順「法言模倣考」（「北海道大学文学研究科紀要」114、北海道大学文学研究科、2004年）は、「揚雄が『論語』を摸倣したと考えられる箇所」を丹念に調査され、「表現形式」と「主張内容」に分けて列挙した労作である。

⑭ 朱熹『楚辞集注』『楚辞後語』（前出）、浅野通有「漢代の楚辞」（『漢文学会々報』14、国学院大学漢文学会、1968年）、小南一郎『楚辞とその注釈者たち』（朋友書店、2003年）、李大明『漢楚辞学史（増訂本）』（中国社会科学出版社、華齢出版社、2004年）などを参照。

⑮ 原文は以下の通り。「自賈誼浮湘、発憤弔屈、体周而事覈、辞清而理哀、蓋首出之作也。及相如之「弔二世」、全為賦体、桓譚以為其言惻愴、読者歎息。及卒章要切、断而能悲也。揚雄「弔屈」、思積功寡、意深文略、故辞韻沈朧。班彪蔡邕、並敏於致語、然影附賈氏、難為並駆耳。」（前出）

⑯ 『詩藪』（雑篇・巻一）に「揚子云反離騒、蓋深悼三閭之淪没、非愛原極切、不至有斯文。」「揚子云反離騒似反原而実愛原、与女嬰之罵同」とある。